

## バルカン諸国の歴史 ～オスマン帝国の遺したもの～



永田 雄三  
NAGATA Yuzo

財団法人東洋文庫  
研究員

オスマン帝国(1300頃～1922年)支配がバルカン諸国の社会に残した歴史的遺産の重要性が、東欧社会主義圏の崩壊以後、再認識されている。そこで、この時代状況を踏まえて、バルカン諸国の中世末期から近世、そして近代初期に到るまでの約500年に及ぶオスマン帝国支配の時代を主に扱うことにし、それ以前の時代については、必要が生じた場合にのみ言及する。

### 克服された暗黒時代史観

1958年に山川出版社から上梓された『世界各国史13 東欧史』は、当時、バルカンを含む東欧史のほとんど唯一の概説書として広く読まれた本である。しかし、この本のオスマン帝国支配時代に関する叙述は、「トルコ帝国の圧政」(ギリシア)、「ブルガリア史上の暗黒時代」、「トルコ帝国の重圧」(セルビア)といった「悪のイメージ」に貫かれている。その後、この本の新版が刊行されることになり、そのとき初めて「オスマン帝国支配下のバルカン」という一節が追加され、私とその執筆を手掛けた。その際に、まずは「暗黒時代史観の克服」という一文から書き始めなければならなかった。

「トルコの圧政」といったイメージは、直接的には19世紀になってオスマン帝国からの独立をめざすバルカン諸民族が、ヨーロッパ諸国の支持を得るために持ち出した政治的プロパガンダによるものである。そして、それが広く受け入れられたのは、ヨーロッパ人の心に古くから潜んでいた「東方からの脅威」(アッティラ大王、チンギス・ハーン、そしてトルコ)という感覚と共鳴したからである。

現在ではオスマン帝国を「トルコ」あるいは「オスマン・トルコ」という言い方はしないし、また、「暗黒の

500年」という考え方も批判されており、より実態に即した客観的な見方ができるようになっている。

### オスマン帝国によるバルカン征服の過程

北西アナトリア(小アジア)の一角に成立した小国(後のオスマン帝国)の軍隊が、バルカン半島に第一歩を記したのは1353年のことである。その後、オスマン軍はバルカン内部に向けて着実に進出する(図1)。この中で最も重要なのは、1389年の「コソヴォの戦い」におけるオスマン軍の勝利である。これがオスマン帝

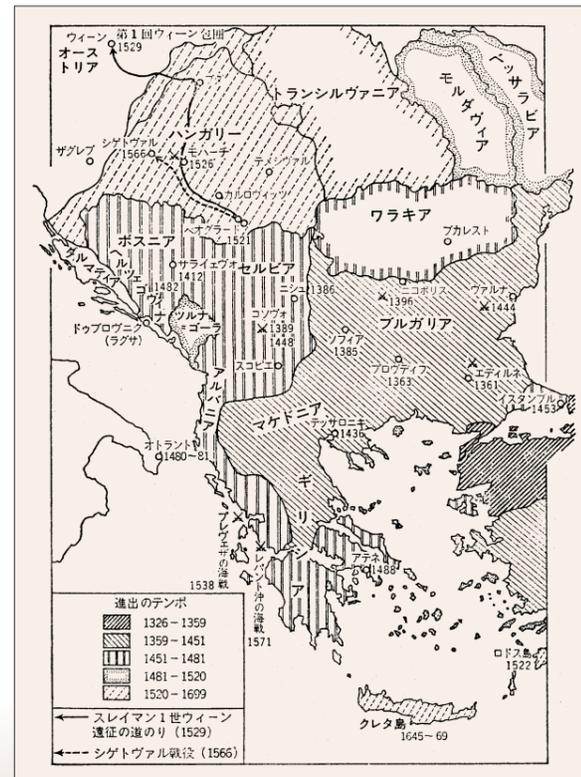


図1 オスマン帝国のバルカンへの進出

国のバルカン支配を確実なものとした。

他方、この戦いの現代的意味がある。それは、この戦いで敗北したセルビア人が、自分たちの民族的「郷土」であるコソヴォから北方へと退去し、その空白にアルバニア人が移住したというセルビア側の主張と、現実にこの地方の住民のマジョリティを形成するにいたったアルバニア人との主導権争いが、今日の「コソヴォ紛争」の一因となっているからである。

これ以後も、オスマン帝国はニコポリスの戦い(1396年)及びヴァルナの戦い(1444年)によってセルビアとブルガリアを完全に併合し、ついに1453年、すでに第4回十字軍の占領(1204年)に伴う略奪によって、事実上滅亡していたビザンツ帝国の息の根を止め(コンスタンティノープルの陥落)、その旧領土の多くを継承した。それでも、オスマン帝国が最終的にバルカン全土を統合するのは、1580年代になってボスニア=ヘルツェゴヴィナ地方を併合してからのことである。この間、約150年の歳月が流れていた。

### オスマン軍に抵抗したバルカンの英雄たち

オスマン帝国の500年に及ぶバルカン支配を「暗黒時代」とする見方は克服された。とはいっても、バルカンの先住民からみれば、やはり異民族・異宗教の勢力であるオスマン軍の「侵略」に対して果敢に抵抗した英雄たちが、現在でもバルカン諸国の民族的英雄とされている。たとえば、コンスタンティノープルの征服王メフメト2世(在位1444～1446年、1451～1481年)の進撃を2度にわたって退けたワラキア公国(現ルーマニア南部)のヴラド串刺し公(1431～1476年、吸血鬼ドラキュラのモデル)、セルビアの「聖マルコ英雄譚」などがある。しかしここでは、そのうちの代表的な人物を一人紹介しよう。それはアルバニアのスカンデル・ベグ(1404頃～1468年)である。

彼は北アルバニアの豪族の子として生まれたが、父がオスマン帝国の宗主権を受け入れたため、当時の慣習に従って、オスマン宮廷に人質として預けられた。そこでイスラムに改宗して侍従として仕えた彼は、勇敢で武勇にも優れていることからアレクサンドロス大王の名にちなんでトルコ語でスカンデルと呼ばれ、やがて軍司令官(ベグ)としてオスマン軍に従軍した。1437年頃、父の領地に軍事封土を与えられて故郷に戻ると、オスマン軍が、ハンガリーの英雄フニャディ・ヤーノシュとの抗争に手をこまねいている隙をついて、独立を求めて反旗を翻した。彼は生涯クルヤと呼ばれる山間の城砦に立て籠もって、ローマ教皇やヴェネツィアなどの支援を得てオスマン軍の攻撃



写真1 アルバニアの首都ティラナの中央広場にあるスカンデル・ベグの銅像

から祖国を守ることに成功した。彼の死後アルバニアは再びオスマン帝国に併合されたが、彼の抵抗は民衆の間に語り伝えられ、アルバニア人の民族統合に大きな役割を果たした。現在でも首都ティラナの中央広場には彼の銅像があたりを睥睨している。

かつて社会主義時代には、この銅像の脇に独裁者エンヴェル・ホッジヤの像があった。しかし社会主義体制の崩壊と同時に、それは引き倒され、今ではスカンデル・ベグの銅像のみが民族統合の象徴として残されている。

### バルカンの征服を可能にした諸条件

オスマン帝国進出以前のバルカンの歴史を一瞥すると、ブルガリアでは、かつて第一次ブルガリア帝国(9世紀半ば～11世紀初頭)と第二次ブルガリア帝国(12世紀末～13世紀半ば)が、ビザンツ帝国の支配を跳ね除けてバルカン全土に勢力を及ぼす勢いを見せたが、やがてビザンツ帝国の支配下に組み込まれた。セルビアでは1168年以降、ネマニッチ朝が隆盛を保ち、1331年に即位したステファン・ドゥシヤン王(在位1331～1355年)の時代に最盛期を迎えた。しかし、この王朝はドゥシヤンの死後急速に分裂し弱体化した。こうした状況の中で唯一オスマン軍を撃退しうる勢力はビザンツ帝国であったが、これもすでに述べたように、その役割を果たせなかった。

バルカン側のこうした状況に対して、オスマン帝国は、当時のヨーロッパ最強ともいえる規律のとれた強力な常備軍(イエニチェリ)を有していた。近代政治学

の先駆として知られるマキャベリの『君主論』は、私が読む限りでは、古代ギリシア・ローマや中世ヨーロッパの軍隊や政治体制を問題にしながらも、実は、随所に「トルコ」の中央集権的な国家体制やイエニチェリ軍団を高く評価している。マキャベリは「トルコ」の軍事力に関するかなり正確な数値を示している。

### 「オスマンの平和」のもとで

バルカン支配のみならず、オスマン帝国そのものの永続性と繁栄を確保したシステムの一つは、良く整備された官僚制に基づく中央集権支配体制とイスラム法(シャリーア)に基づく公正な支配である。オスマン帝国は、トルコ人によって建国された国家ではあるが、中央アジアから西アジア、さらにバルカンへと移住したトルコ人の数は先住民の数よりもはるかに少なかったはずである。16世紀のオスマン帝国の領土は、途方もない広がりを持っている(図2)。この広大な領土を支配するための人材リクルートシステムとして導入されたのが「デヴシルメ(徴用)」と呼ばれる制度である。これはアナトリアと、特にバルカンのキリスト教徒子弟を君主(スルタン)の個人的な「奴隷」として徴用し、イスラムに改宗させて、宮廷やトルコ系高官のもとで訓練を施す制度である。彼らの大多数は、将来イエニチェリなどの軍人となった。彼らの身じろぎ一つしない規律の正しさは、当時ヨーロッパ諸国から訪れる使節たちに感嘆の声をあげさせている。

さらに、このうち最も優秀な人材は、宮廷に召し上



図2 16世紀のオスマン帝国領域図

げられ、宮廷作法や行政の実務を学んだ後、出仕して官僚機構のトップの地位に抜擢された。今日でいう首相、各省庁の大臣、地方知事の大半がこれら「デヴシルメ」制度によって集められた人材であった。この制度を、当時オスマン帝国の宿敵ハプスブルク帝国から派遣された使節は、門閥によらない能力主義と絶賛し、門閥と縁故に縛られたヨーロッパの現状を憂いている。

こうしてリクルートされたバルカンの子弟は、身分的にはスルタン個人の「奴隷」とはいえ、社会的にはれっきとしたエリートである。その一例は、スレイマン1世(在位1520~1566年)の晩年の大宰相ソコルル・メフメト・パシャである。1505年頃、ボスニアの片田舎ソコロヴィッチ村に生まれた彼は、18歳でセルビア正教会の助祭をしているときに徴用され、イスラムに改宗してメフメトを名のった。彼はスレイマン1世の「太刀持ち」を出発点に大宰相の地位に昇りつめると、故郷の親類縁者を呼び寄せて官僚や軍人

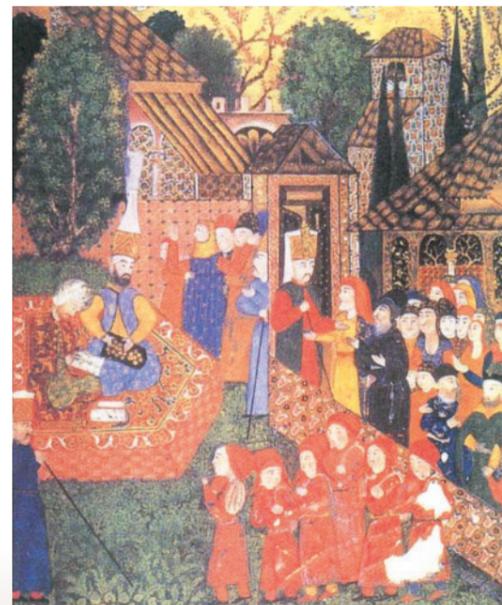


写真2 デヴシルメ(徴用)されたバルカンの子供たちは赤い服を着せられてイスタンブルへ向かった



写真3 トプカプ宮殿博物館におけるイエニチェリ軍楽隊行進のデモンストレーション



写真4 ブルガリアにあるトルコ人村のシーア派の聖者廟



写真5 サライェヴォの旧市街バシュチャルシーヤ地区

のポストを与えた。その結果、ソコロヴィッチ一族はイスタンブルで最大の派閥を形成した。彼は徴用されてイスタンブルへ行く途中にドリナ川を渡ったときの苦勞を思い出し、ここに長大な橋を建設させた。これが1961年にノーベル文学賞を受賞した旧ユーゴスラビアの外交官イヴォ・アンドリッチの大河小説『ドリナの橋』の舞台である。

オスマン帝国を支えたもう一つの制度は、「ティマール制」と呼ばれる「軍事封土制」である。これは「いざ鎌倉」というときに従士を連れて戦場に馳せ参じることを条件に、一定の土地から生み出される租税の徴収権を「封土」として与えるもので、その多寡に応じて在郷軍団のハイヤラーキー(ヒエラルキー)が構成された。その最小の「封土」をティマールと呼び、その所有者が「スィパーヒー(騎士)」である。彼らは平時には自分の「封土」に近い都市に住み、農民と農業生産を管理する。ただし行政権や裁判権は、イスラム法に詳しい法官(カーディー)が掌握している。

オスマン帝国は征服と同時に「検地」を行って、各地域の実情を把握し、それに応じて租税の割当てと徴収が詳細な法令に準拠して行われた。この制度のもとでは、農地はすべて国有地と位置付けられていたため、スィパーヒーや上級司令官たちによる土地所有、すなわち領主化や地主化への道は閉ざされ、農民はオスマン以前の封建領主による恣意的な搾取から解放された。このことも、オスマン帝国によるバルカン征服とその永続性を保証したものとして近年では高く評価されている。

### 都市と商業の発達

オスマン帝国は法律の整備と土木建築に力を注いだ国家である。この点でギリシアよりもむしろローマ帝国の文化を受け継いでいる。バルカンの征服後、ハンガリーを越えてウィーンにまで軍隊を派遣するに

は、莫大な軍需品や食糧、そして兵員を輸送するための長大な軍事道路と橋の建設が必要であった。これらは同時に通商路としても機能したため、商業とその拠点である都市が発達した。

イスラムには「ワクフ」と呼ばれる宗教的な寄進制度がある。これは特定の個人が自己の資金で、モスク・学校・病院・図書館・水飲み場・道路・橋などの宗教・公共施設を建設し、なおかつこれらの維持・運営に必要な資金を捻出するために、土地、家屋、店舗(バザール)、公衆浴場(ハマーム)などの私有財産から生み出される収入を充てる制度である。モスクなどの大きなイスラム建築が、若干の例外を除いて、すべて個人名で呼ばれているのはこのためである。

この制度の発達の背景には、スルタンによる恣意的な財産没収や均等相続を原則とするイスラムの相続法を回避するという現実的な配慮があるが、他方では「聖」と「俗」を区別しないイスラムに固有な観念によって、その適用範囲が広いということもある。要は「ワクフ」によって都市や地域のインフラが整備され、アメニティが保証されたのである。その典型的な例が、ボスニアの首都サラエヴォである。この町は、征服以前には小さな集落しかなかった場所に、最初からイスラム都市として建設されたのである。このため、当初はイスラム教徒が住民のほとんどを占めていた。その後東方正教徒、カトリック教徒、ユダヤ教徒が移住し、サラエヴォはイスラム教徒と非イスラム教徒住民が共存するボスニア州の主都となり、アドリア海に面した港町ドブロブニク→モスタル→サラエヴォを経てバルカン各地に広がる通商路の拠点となった。また、周辺の山地から産出される鉱物資源を原料とした工業都市としても発達した。

首都イスタンブルからエディルネを経てバルカン各地へと北上する軍事的・商業的の道路網が幹線で、その途上にある都市がオスマン支配の拠点として発達



写真6(左) モスクの庭でつるぐサライエヴォの母子  
 写真7(中) オスマン帝国の主任建築師ミマール・スィナン<sup>1)</sup>の弟子によるモスタルの美しい橋(内戦前の写真)  
 写真8(右) ウィーンの国立博物館に陳列されたオスマン軍将軍のテント。中に「コーラン」がおかれ、テントの両側にある竿の先に遊牧的伝統を象徴する馬の尻尾を飾り付けたのぼりは将軍の身分を示す

した。これにはバルカン三道があった。第一は黒海沿岸に沿ってまっすぐ北上し、ポーランドなどの中欧にいたる右道、第二はソフィア→ベオグラード→ブダペストを経てウィーンにいたる中央道、第三はギリシアのテッサロニキを経てアドリア海に抜ける左道、すなわち、古代ローマのヴィア・イグナティア街道であった。そしてこれらを縦横につなぐ枝道が発達し商業網が広がった。征服当初、これらの都市はイスラム教徒による支配の拠点としての性格が強く、非イスラム教徒たちは農村部に避難したといわれるが、やがて都市へと再移住した。

### 不平等の中の平等

オスマン帝国はイスラム政権であったため、非イスラム教徒が国政に参与したり、法的にイスラム教徒と完全に平等というわけにはいかなかった。しかし歴代のイスラム政権はユダヤ教徒やキリスト教徒を、それだけの理由で迫害したり、改宗を強要することはなかった。非イスラム教徒はイスラムの傘のもとで「保護民(ズィンミー)」と位置付けられ、「人頭税(ジズヤ)」を支払いさえすれば宗教的・社会的自治を大幅に認められた。オスマン帝国では、これは「ミレット」制度と呼ばれた。従って、オスマン帝国500年の支配のもとで、バルカンの現地民はイスラムへの改宗を強要されることは全くなかった。

ただ、こうした穏健な統治政策のもとで、しだいにイスラムに改宗する人々が現れた。特にボスニア=ヘルツェゴヴィナや北部ギリシアから南部アルバニアにかけての地域では、現地民のイスラムへの改宗がゆっくりと進むことによってイスラム化した。この地域は現在でもバルカンにおけるイスラム文化の中心であり、そのまた中心がサライエヴォである。これに

対してトラキアとブルガリアはトルコ系の人々がアナトリアから移住することによってイスラム化とトルコ化が進んだ地域である。19世紀末になって、オスマン帝国がアナトリアへと後退すると、残されたトルコ系住民は「少数民族」となり、イスラム文化は「表面上」姿を消した。

どちらの地域でもバルカン諸民族の古来の教会制度や共同体秩序は破壊されることなくそのまま温存され、オスマン時代を通じて教会の聖職者や共同体の首長たちが社会的に大きな影響力を保った。

### トルコ・イスラム文化の名残り

このテーマでもっともわかりやすいのはモスクや公衆浴場、橋、城塞、民家といったハードな土木建築文化である。特にサライエヴォの旧市街(バシュチャルシーヤ地区(写真5))は、モスク、バザールなど伝統的なイスラム都市の景観をそのまま現在に伝えてくれる。ここからアドリア海へ下る道中の中程にあるヘルツェゴヴィナの主都モスタルの町に残る石造りの美しい橋は、「ドリナの橋」とともに、16世紀「トルコ」の橋梁技術の粋を集めたものである。バルカン各地に今でも見られる「トルコ風」の民家建築を除けば、こうした構築物は帝室直属の建築師の手によるものである。「デヴシルメ」によって中央アナトリアのカイセリ地方から徴用されたスレイマン1世の主任建築師ミマール・スィナンがその代表である。

こうしたハードな文化だけではなく、バルカン諸国へのトルコ語の影響、料理・服飾・音楽・舞踏のようなソフトな文化の名残りも今日確認することができる。現代ギリシアの音楽と舞踏には、さまざまな側面に「トルコ」の影響が見られるのがその例である。広場などで人々が輪になって踊るホロスの一形態で



写真9 捕虜を連行するトルコ人兵士 写真10 キオス島の教会に描かれた「トルコ人による虐殺」を訴えた壁画

あるゼイベキコスや、下町の居酒屋で歌われ、踊られるレベティコスにはトルコ音楽の影響が濃厚に見られる。

### 「バルカン問題」の発生

これまで16世紀を中心にバルカン史の一端を見てきたが、17世紀末のカルロヴィッツ条約によるハンガリーの喪失、そして18世紀にはロシア帝国との度重なる戦争での敗北など、オスマン帝国はしだいにヨーロッパ列強の圧迫にさらされるようになった。この間に、小農民的土地保有を原則とした「ティマール制」が解体し、「チフトリキ」と呼ばれる「大土地所有」と徴税請負制が普及し、それを足場に「アーヤーン」と呼ばれるトルコ系の名士層がバルカン諸民族の前に立ち上がった。「トルコの圧政」と呼ばれるものの内実は、彼らの恣意的な搾取によるところが多いといわれるが、その実態はなお定かではない。その反面、「ミレット」のもとで温存されたバルカン諸民族の共同体の首長、東方正教会の主教などの影響力が増大した。

19世紀に入って、民族主義思想がバルカンにも浸透すると、エーゲ海・地中海やドナウ河を經由した商業を通じて富裕化したキリスト教徒の商人や有力者、そして宗教的指導者を中心に民族独立運動が高揚した。その嚆矢は、家畜商人カラジョルジェを指導者として1804年に始まった「セルビア蜂起」であるが、これらの運動の中で現在の世界情勢を考える上で、もっとも重要なのは、1820年に始まったギリシア人の独立戦争である。この運動は、近代ヨーロッパ文明の「祖」と位置づけられたギリシアが「野蛮なトルコ」から自由を勝ち取るための蜂起と理解されて、西ヨーロッパの知識人や文人によって熱狂的に歓迎された。その火付け役を果たしたのがイギリスの

詩人バイロンの『チャイルド・ハロルドの巡礼』である。この本が1812年に出版されると、彼は一夜にしてヨーロッパのベストセラー作家となった。後に彼が独立戦争の義勇兵としてミソロンギに赴き、1824年にそこで病死したことが、かえって知識人の同情を呼び

起こし、それがバルカン諸民族の中でギリシアが最初に独立を勝ち取る(1829~1830年)ことを可能にした。この熱狂を絵画で表現したのが、フランスの画家ドラクロワの『キオス島の虐殺』と『ミソロンギの廃墟に立つギリシア』である。

その後、1875年の「ボスニア蜂起」、1876年のブルガリアにおける「四月蜂起」と情勢が緊迫化し、それに対するオスマン帝国の弾圧が強まると、「残酷なトルコ人」のイメージは増幅し、それは、そのままストレートに日本へも伝えられた。オスマン帝国がバルカン領土の大半を一気に失ったのは、1878年のベルリン条約であった。この条約によって、ツルナゴラ(モンテネグロ)、セルビア、ルーマニアの独立、ボスニア=ヘルツェゴヴィナのオーストリアによる併合、ブルガリアの自治などが決められ、現在のバルカン諸国の原型ができあがった。しかしその後も、バルカン諸民族の間では「オスマン帝国の遺産」をめぐる争いが行われ、それは第一次・第二次バルカン戦争(1912~1913年)を引き起こした。そして1914年、サライエヴォの町でセルビア人の若者がオーストリアの皇太子夫妻を暗殺したことが、第一次世界大戦勃発の引き金となった。

こうしてみると、バルカンにおける「民族紛争」は、近代以前のオスマン帝国支配が体現していたある種の普遍性が失われて以後、表面化し、それが今日まで尾を引いているといえるのではなからうか。

#### <参考文献>

- 1) 林佳世子「オスマン帝国500年の平和」講談社(興亡の世界史10)2008年
- 2) 永田雄三・羽田正「成熟のイスラーム社会」中央公論社(世界の歴史15)1998年(2008年文庫版)
- 3) 柴宜弘編「バルカン史」山川出版社(新版世界各史18)1998年

#### <図・写真提供>

- 図1、2 「新版 東欧史」矢田俊隆編 山川出版社 1977年  
 写真1、3、4、5、6、7、8、10 筆者  
 写真2、9 16世紀のミニアチュール「成熟のイスラーム社会」